総 説

日本口腔腫瘍学会10年の歩みと展望

日本口腔腫瘍学会理事長

清水 正 嗣

要旨：日本口腔腫瘍学会はその起源を10年前の1983年2月26日、大分医科大学において創設された口腔腫瘍懇話会に見いだす。

これら10年間におけるその歴史は、懇話会時代（1983—'85）、研究会時代（1986—'88）、日本口腔腫瘍学会時代（1989年より今日に至る）の3時代に分類される。

各々の時代は、その学術発表会、あるいは研究会そして学術総会を開催し、また、各々の学術発表雑誌を発行した。本論文では、それらの内容が相当に詳細に検討され、記述された。

本学会の会員数は、1983年創設時の69名から、1992年には、991名にまで増加した。

本学会の学術機関雑誌、日本口腔腫瘍学会誌（口腔腫瘍と略記）は、年2回発行であったが、年3回以上の発行が会員より強く希望され、1993年よりまず年3回が実現した。

本学会の特長は、その1983年に口腔腫瘍懇話会として創設された時の精神にある。会員はその研究を平等に発表する権利を持ち、その発表課題に関する討論を、その会員の社会的身分、立場などに関係なく民主的に、なんらの差異なく実施できる。

ある課題は、時間に関係なく討論されるし、あるいは、時間がどうしても取れない時は、次の学会における重要課題として、持ち越して発表、討議される。本学会または、学術総会には、口腔腫瘍に学問的関心を持つ者なら誰でも、また地域的制限無く、かつ、どの基礎、並びに臨床の分野からでも参加できる。

近い将来には、本学界の発展は、日本国内のみで無く、国境を越えて広がり、学問的にも広く認められ、世界中の多数の国々から参加者を得て、国際的存在になるであろう。

キーワード：日本口腔腫瘍学会、口腔腫瘍懇話会、口腔腫瘍研究会、日本口腔腫瘍学会誌、口腔腫瘍（略名）。

I. はじめに

本学会の創設をその懇話会時代にさかのぼるとちょうど10年経過したことになり、今回の第11回総会において、この企画を立てられたことは、正に時宜を得た計画であり、清水は、立場上からしても、大橋総会長にお礼を申し上げる。

本論文は、日本口腔腫瘍学会の創設の歴史を、その懇話会時代にまでさかのぼり、今回の第11回学術総会における研究・講演発表などにまで結びつき、発展する礎石になればと望んで論を進める。

II. 本学会創立の経緯

始めに、本学会創立、同創設の経緯を述べると、まず、口腔腫瘍懇話会として、1983年（昭和58年）の2月26日（土）に発足し、同日の午後2時から夕刻まで第1回の学術発表会が大分医科大学の臨床中講議室に始められたことに端を発する。

この懇話会発足に当たっては、「口腔腫瘍研究会（仮題）」とされていた。しかし、当日開かれた世話人会において「第1回口腔腫瘍懇話会」となり、第2回のそれにつなが事とされた。その時

表 1 口腔腫瘍懇話会の時代
—1983年～1985年—

名 称	開催地・担当	会期・他
第1回口腔腫瘍懇話会 指定演題：無し 一般演題：14題	大分・清 水 正 嗣	1983. 2. 26 参加者：33施設, 69名
第2回口腔腫瘍懇話会 指定演題：1) 歯源性腫瘍, 歯源性嚢胞 2) 顎の良性・悪性腫瘍 一般演題：28題	大分・清 水 正 嗣	1984. 1. 21
第3回口腔腫瘍懇話会 指定演題：1) エナメル上皮腫の組織像と治療法 2) 頸部郭清術の予後成績 一般演題：42題	大分・清 水 正 嗣	1985. 1. 19

写真 1 第1回口腔腫瘍懇話会プログラム

認められた設立趣意書は次のようであった。主旨・目的は、歯源性・良性・悪性を含めた口腔腫瘍の研究、臨床に携わる各科領域の専門家、臨床家が一堂に会して、経験と研究を発表し、その所属に関係なく、当領域の学術の発展と交流を図る事とされた。

この懇話会時代は3年間続き、学術発表総会も3回行われた。

次いで、1986年（昭和61年）1月25日、第4回が札幌で開催された時、口腔腫瘍研究会に発展的改名をし、回数は歴史を残すことの意義を尊重することと合わせて、懇話会時代も年一回の総会で

あったから、通し回数で進める事として、第4回口腔腫瘍研究会とされた。

さらに1989年（昭和64年）1月21日、郡山で開催された第7回において日本口腔腫瘍学会に発展的改組となった。そして、今回の第11回総会に進んできたわけであるが、次に各会の時代をまとめて記す。

III. 口腔腫瘍懇話会の時代（表1）

1. 第1回口腔腫瘍懇話会（写真1）

1983年2月26日（土）に行われた第1回口腔腫瘍懇話会について更に述べると、本懇話会設立が計画されたのは、現札幌医科大学の小浜源郁教授と埼玉県立がんセンター口腔外科の岡部貞夫医長の二人が、かつて臨床研究の教室を共にしていた清水のところに来て、口腔癌ほかの治療上の問題点を十分検討する場が欲しい、できるならば、有志で良いから、全国から集まってする勉強会を清水の下で、持てないかという提案からである。

したがって、始めは内輪に呼びかけもされたもので、特に、関連類似学会の存在への配慮、口腔外科との隣接領域問題なども論じられていたので本懇話会ないしは研究会の設立は、あるいは目的に反する結果になりはしないかとする慎重論、消極的反対論も一部に出されたので、一層当初は内輪に、あるいは周囲の反響を見てという声も少なくなかった。このような流れは、すでに歴史に属するもの故、率直に述べておこうと思うが、その反対論の方については別として、本学会の礎石の

設立を、当時の日本口腔外科学会理事長の園山昇先生が「口腔腫瘍研究会、ないしは懇話会の設立、全国的展開には、学会として反対の声があり立場としてお伝えするが、個人的意見としては、勉強の会であるから、清水は遠慮されることはないでしょう。」とその設立に賛意を伝えて下さったことは嬉しかった。同様に間接的ないしは積極的に賛同して下さる先生は、全国的にも少なくとも、北海道より沖縄までの参加者が69名、33施設からあり、一般講演が14題発表された。

第1回の学術発表会の開催時期については、他の学会と重ならず、みんなが比較的楽に時間の取れる月にと話し合いが進み、更に、大分で開くなら大分で美味しい河豚の時期、冬が良いということで1～3月頃に決められたと記憶する。口腔腫瘍懇話会は、午前中が发起人・世話人会、午後2時から総会・学術発表に当てられた。その時の主旨として、単なるミニの学会にならないように、十分な時間を発表と質疑応答討論にかけようということで、演題数は今後とも多過ぎない方がよいということも強調され、実施された。

閉会後は、別府のホテルで、会参加の多くの方々の出席を得て懇親会が開かれ、大分県以外では口に出来ない事になっている肝付きの河豚をつつきながらの温泉と合わせての会員親睦の会となったが、思い出深く今でも脳裏に浮かんでくる。

2. 第2回口腔腫瘍懇話会

第2回の口腔腫瘍懇話会は、第1回の時の幹事会・世話人会の申し合わせに従って、大分医科大学で持たれた。その会期は、他の学会の開催を邪魔しない、あるいは、邪魔されない時期を選ぼうという初回の時の検討事項が尊重され、また大学の入学関連の雑務に追われる時期は避けようということで、1月の中下旬が第一選択とされ、具体的には、1月21日（土）午前9時より開催された。この開催時期選択の原則は現在にも続いており、今回の第11回学術総会も同様に1月の下旬ということになった。

第1回懇話会との違いは、第2回の本懇話会では、初めて指定演題として「1) 歯原性腫瘍、2) 顎の良性・悪性腫瘍」の2題が持たれたことであった。一般演題は28題で、学術発表の時間は半日であった。

更にこの懇話会においては、当時の大分医科大学中村家政学長から、第1回の時と同様にご挨拶をいただいたが、これは第1回における大分医科大学病理学教室中山 巖教授の学術発表と共に、本懇話会を大学に公認させるという一歩を進めたことになった。

この第2回懇話会に次いで、もう一回この会を大分で続けようということになって、第3回口腔腫瘍懇話会も、再度大分医大にて持たれた。

3. 第3回口腔腫瘍懇話会

会期は、1985年1月19日（土）、全一日を取り、場所は医大を離れて別府のホテル白菊のホールを使った。指定演題は、1) エナメル上皮腫の組織像と治療法、2) 頸部郭清術の予後成績の2題、一般演題は42題で、第1回の時の3倍となった。

この第3回が前2回の懇話会と異なった点は、特別講演として、東京医科歯科大学の解剖学佐藤達夫教授の「頸部の臨床解剖について」の講演を実施したことで、これは多数会員の好評を得た。

このように本懇話会への参加者が多くなったことは、初めの本懇話会の理念、自由な発表と、不消化にならない討論、既成の学会に得られないものを、この懇話会、研究会で創って行こうという理想が、傷つき、遠ざかって行きはしないかと危惧する意見も出されてきた。このようにいっても、全体として、参加者が増加してくることは、この研究会の必要性が広く認められてきつつあることを意味するものとされた。とすると、そのような傾向に、本研究会としても、道を開かなくてはならないという認識になって、まず研究会に進もうという方向をとった。

IV. 口腔腫瘍研究会の時代（表2）

1. 第4回口腔腫瘍研究会（写真2）

こうして生まれた口腔腫瘍研究会の第1回到相当する第4回口腔腫瘍研究会は、1986年1月24日・25日の2日間にわたって開かれた。会長は札幌医科大学の小浜源郁教授で、この会から初めて2日間開催となり、第一日は、教育講演が、表2に見るように4題持たれた。

2日目には、現日本医大放射線科の堀内淳一教授の特別講演が「口腔・上顎癌の放射線治療」について持たれた。これは、前日の教育講演とも関

表 2 口腔腫瘍研究会の時代
—1986年～1988年—

名 称	開催地・担当	会期・他
第 4 回口腔腫瘍研究会	札幌・小浜源郁教授	1986. 1. 24～25
指定演題: 1) 稀な腫瘍		
特別講演: 1) 口腔・上顎癌の放射線治療	東医歯大・医放・堀内淳一助教授	
教育講演: 1) その臨床的診断の確立と治療方針の決定について	大分医大・歯口外・清水正嗣教授	
2) 悪性腫瘍の浸潤・転移に対する C T 診断	九州大学・歯 放・神田重信教授	
3) 口腔癌の病理	北 大・口腔病理・雨宮 璋教授	
4) B R M スクリーニングとその成績—OK-432を中心として	中外製薬医薬学術 I ・富倉弘圭講師	
一般演題: 51題		
第 5 回口腔腫瘍研究会	名古屋・金田敏郎教授	1987. 1. 23～24
シンポジウム: 口腔癌に対する化学療法 (6名・6演題)		
講師—1) 東医歯大口外 I ・橋本賢二助教授 2) 日本化薬・浴本久雄講師		
3) 札幌大口外・山本悦秀助教授 4) 徳島大口外 II ・佐藤方信教授		
5) 広島大口外 I ・吉賀浩二助教授 6) 名大口腔外科・藤内祝講師		
招待講演: 中国医学教育の現状と展望		
中華医科大・口腔医学系・鐘 宝民氏		
特別講演: 頭頸部の外科療法—特に舌癌について—		
愛知県がんセンター・頭頸部外科・松浦秀博博士		
一般講演: 59題		
会員名簿の作成: 1987年度 (同年11月). 会員数: 451名		
第 6 回口腔腫瘍研究会	千葉・野間弘康教授	1988. 1. 22～23
シンポジウム: 頭頸部郭清術の適応と指針 (6名・6演題)		
講師—1) 九大歯口腔外科 I ・大関 悟講師		
2) 札幌医大・口腔外科・小浜源郁教授		
3) 埼玉県立がんセンター・口腔外科・岡部貞夫医長		
4) 東京歯科大・口腔外科 I ・野間弘康教授		
5) 名大・医・口腔外科・金田敏郎教授		
6) 大分医大・歯口外・清水正嗣教授		
特別講演: 頭頸部癌の放射線治療		
放射線医学総合研・垣元 博博士		
一般演題: 60題		

連を持ち、本研究会が、学術会議の中心テーマを明らかにしつつ、その討論の展開からなお不十分な点は、次年度の主題に持ち越す。そのようにして、本研究会の特色を創って行こうと目指すようになった。札幌における研究会の一般演題は51題で、今までで最高の参加者と発表演題となった。

2. 第5回口腔腫瘍研究会

本研究会は1987年1月23日・24日の2日間、名古屋大学の金田敏郎教授を会長として開催された。

この研究会の開催回数は、前述のごとく通回数として第5回が持たれたわけであるが、第一日の夕刻開かれた懇親会で、金田会長及び清水の恩師である岡 達名誉教授がご挨拶を下さり、その際「この研究会は、懇話会時代を含めて今回初めて日本の本州において開催、学術総会を持つことになりましたね」という意味の祝辞を言われたことが思い出される。岡先生の言葉通り、九州と北海道で通算4回を持ったものであり、名古屋での

写真 2 第4回口腔腫瘍研究会プログラム

開催は、本学会の歴史において1エポックをなすものとなった。

その内容は、シンポジウムとして「口腔癌に対する化学療法」を6名の演者によって論じ、「中国医学教育について」の招待講演が中華医科大学の鐘氏によって行われ、愛知県がんセンターの松浦秀博博士が「頭頸部癌の外科療法、特に舌ガンについて」の特別講演を話された。

一般演題は59題、ほかの講演などと合わせると非常に大きな研究会で、もはや学会規模といえるものであった。

この年、1987年の11月、初めて本研究会の会員名簿が作成された。会員数は451名であった。

3. 第6回口腔腫瘍研究会

口腔腫瘍研究会時代の最後は、第6回が持たれた1988年1月22日・23日であり、場所は千葉、野間弘康会長の下であった。シンポジウムは「頸部郭清術の適応と指針」であり、6名の演者によって6演題が討議された(表2)。

特別講演は「頭頸部癌の放射線治療」であり、講師は、放射線医学総合研究所の垣元 博博士、前年の名古屋での特別講演が外科、一昨年札幌でのそれが放射線であったことに対応し、会員たちのそれらに対する関心は高かった。一般演題も60題と前年と同様の多数演題であった。

V. 日本口腔腫瘍学会の時代(表3)

このようにして、毎年の学術総会は、口腔腫瘍

としての特殊性を尊重しつつ、内容は豊かになり参加者の量も質も高くなって、本研究会を学会にという声が高くなり、翌1989年1月20日・21日に郡山で開かれた総会において日本口腔腫瘍学会となった。

1. 第7回日本口腔腫瘍学会(写真3)

会長は高井 宏教授で、それまでの口腔腫瘍研究会から初めての学会への発展的改組として、名称は変えられたが、学術総会の回数は、懇話会から研究会になった時と同様に、それまでの毎年の持続回数が尊重され、その学会は、第7回日本口腔腫瘍学会となった。

学術総会での特別講演は2題「歯源性腫瘍の組織学的分類他」について鈴木鍾美教授が、また「生体材料について」を森脇 豊教授が、そして特別発言を森 昌彦教授が受け持たれた。

一般演題は75題で、これまでの学術総会の中で最も多く発表された。この総会を歴史的に特徴付け、残すべき事項は、学会名を「日本口腔腫瘍学会」に正式決定し、対応する英文名を、Japan Society for Oral Tumors としたことである。更に学会の機関雑誌名を「日本口腔腫瘍学会誌」とし略名を「口腔腫瘍」、および英文で“Journal of Japan Society for Oral Tumors”，略名を“J Jpn Soc Oral Tumor”に決定した。

2. 第8回日本口腔腫瘍学会

1990年は、1月19日・20日の2日間にわたって第8回日本口腔腫瘍学会が埼玉県大宮で、岡部貞夫医長を総会長として開かれた。本学会では、その学術総会を総会長の方針によって運営する権限を他の学会より大幅に認めて、その特色を出すようにしようということになって、岡部総会長の方針が強く反映される学会となった。彼の出身施設の専門に依じて、癌腫を主対象とし、その臨床的研究発表の水準を量的質的に相当に高くするという方針—例えば大分からの発表なども程度が低過ぎると採択拒否されたが、発表責任者の清水は何も抗議しなかった—で、演題数は少なくともよいとされた。この方針には、在来のあり方と違い過ぎるという批判の声も一部にあったが、本学会の懇話会時代の初心に帰るところが有ってもよいのではないかとそのまま進められた。一方、ワークショップのテーマは表3に見られるように8テ

表 3 日本口腔腫瘍学会の時代
—1989年～1993年に至る—

名 称	開催地・担当	会期・他
第7回日本口腔腫瘍学会 特別講演：1) 歯原性腫瘍の組織学的分類，特にWHO分類と診断基準 2) 生体材料について 特別発言：歯原性腫瘍の組織化学—過去，現在，未来— 一般演題：75題 学会名：日本口腔腫瘍学会（日）Japan Society for Oral Tumors (E) 学会（機関）雑誌名：日本口腔腫瘍学会誌 略名：口腔腫瘍（日）J Jpn Soc Oral Tumor (E) を決定。	郡 山・高井 宏教授 岩手医大・歯・口腔病理 鈴木鐘美教授 朝日大・歯・歯科理工 森脇 豊教授 朝日大・歯・口腔外科 I 森 昌彦教授	1989. 1. 20～21
第8回日本口腔腫瘍学会 ワークショップ・テーマ：1. 舌扁平上皮癌に対する手術療法，放射線療法の適応と限界（講師—東医歯大・天笠助教授他） 2. 再建手術の適応と評価 3. 口腔領域扁平上皮癌症例に対する化学療法，免疫療法の現状と展望 4. 再発癌の治療の現状 ほかに4題，計8テーマ 一般演題：69題	大宮（埼玉）・岡部貞夫医長 ワークショップ・テーマ：1. 舌扁平上皮癌に対する手術療法，放射線療法の適応と限界（講師—東医歯大・天笠助教授他） 2. 再建手術の適応と評価 3. 口腔領域扁平上皮癌症例に対する化学療法，免疫療法の現状と展望 4. 再発癌の治療の現状 ほかに4題，計8テーマ	1990. 1. 19～20
第9回日本口腔腫瘍学会 （第16回国際顎顔面外科学会と合同開催） 特別講演：1) 顎顔面領域における軟組織と骨の再建 2) 薬剤耐性と癌化学療法 一般演題：170題 示説：86題	大分・清水正嗣教授 ボン大学 口腔顎顔面外科学 E. Krüger 教授 大分医大・生化学 I 桑野信彦教授	1991. 3. 31～4.3
第10回日本口腔腫瘍学会 特別講演：1) お付き合いのロマンとフィロソフィー 2) Reconstruction of Bone and Soft Tissue in Head and Neck Area Following Tumor Resection ワークショップ： 1) 口腔癌の免疫療法 講師 東医歯大 高橋雄三助手他 3名 2) 顎・口腔の再建 講師 鶴見大口外 I 佐藤淳一講師他 3名 一般演題：58題 示説：57題	広島・高田和彰教授 柏厚生病院耳鼻咽喉科 佐藤靖雄名誉教授 ハノバー医科大学顎外科 Prof. J. E. Hausamen	1992. 1. 28～29

マの多面に及び，これに主体が置かれた。それでも一般演題は69題に上り，総会長が感激の涙を流して喜ばれたほどの盛会であった。

3. 第9回日本口腔腫瘍学会（写真4，5）

1991年は，第9回日本口腔腫瘍学会が大分で開催されるように予定されていた。しかし，同年には，第16回国際顎顔面外科学会学術総会が清水を会長として大分に開催されることが先に決まっていたこととあいまって，これとの併会開催が決定

され，実施された。したがって，会期も1月でなく，3月の31日から4月3日まで，4日間にわたり本会会員の方々の協力，支援の下にいろいろ多くの負担を日本中並びに国際的にも多数の施設人々に引き受けて頂いて，初めての国際学会開催が実現した。これは，日本口腔腫瘍学会と，日本で初めて持たれた口腔外科関連の国際学会との併合開催ということで，別の意味でも，非常に意義深い学会が持たれたことになったと考えられた。

写真 3 第7回口腔腫瘍研究会プログラム

この回において日本口腔腫瘍学会への発展的改組が決められ、第7回同学会となった。

特別講演として、ボン大学の Prof. Krüger による「顎顔面領域における軟組織と骨の再建」と大分医大の桑野教授による「薬剤耐性と癌化学療法」との2題が行われ、好評であった。一般演題は170題、示説が86題であった。

4. 第10回日本口腔腫瘍学会

1992年は、1月28日・29日の2日間にわたって広島の高田和彰教授を総会長として、第10回本学会が開催された。

特別講演は、元東大耳鼻咽喉科主任佐藤靖雄名誉教授による「お付き合いのロマンとフィロソフィー」と、ハノーバー医科大学口腔顎外科の Prof. J.E. Hausamen による「頭頸部領域腫瘍切除後の骨及び軟組織の再建」の2題が行われた。特に佐藤先生の講演は、先生の哲学をかつての上顎洞癌に対する3者併用療法の開発の歴史とダブらせて聴かせて頂き、感慨深いものがあった。ワークショップは「免疫療法」と「再建」についての2題が、各々4名の若手新進気鋭の講師達を中心として活発な討論と共に発表が進められた。

一般演題は58題、示説が57題であった。

その示説では、中央にパネルを移動させてから説明講演、討論をそれぞれに実施する新しい方法を高田総会長が採用し、実り多い発表となって、みんなに喜ばれた。

写真 4 第9回日本口腔腫瘍学会プログラム英文表紙

本学術総会とは第16回国際顎顔面外科学会 (IAMFS) と併合開催であったので、英・和両文のプログラムを作成した。

写真 5 第9回日本口腔腫瘍学会プログラム和文表紙

写真4の反対側表紙面が用いられた。

5. 第11回日本口腔腫瘍学会

こうして、1993年1月28日・29日の2日間、第11回日本口腔腫瘍学会が新潟の地で、大橋靖総会長ののもとで開催されて、本稿の元である特別講演が持たれた。本学会はこの1993年春で、口腔腫瘍懇話会時代の創設から満10年を経過したことになる。したがって、この第11回学術総会において、この特別講演が企画されたことの意義は十分に強

表 4 会員数の時代・年代別推移

時代別	年度別	会員数
口腔腫瘍懇話会	1983	69
	'84	131
	'85	193
口腔腫瘍研究会	1986	332
	'87	498
	'88	571
日本口腔腫瘍学会	1989	739
	'90	794
	'91	875
	'92	991

調されてしかるべきものである。

その内容としては、特別講演 1 題のほか、ワークショップ 2 題が注目された。

ワークショップ (1) においては、UICC の TNM 分類についての専門的見直しの一環として、下顎骨肉癌の T 4 カテゴリーを論ずるものであり、その (2) は超高齢者の口腔癌治療についてであった。共に基調講演者の他 10 名のスピーカーが用意されていたので、活発な発表、討論であった。しかし、時間に不足が見られ、結論は見いだし難かった。そこで本学会の懇話会時代の伝統に準じ

て、次の学会への宿題として明確に指示されたから、来年第 12 回学術総会以降が楽しみとされるものであった。これらのほか主題講演 23 題、一般講演は 48 題、示説 40 題の多数が発表討論された。

以上 10 年間の本学会の学術総会の推移より、その変動、発展を概観したが、その会員数の時代・年代別推移を見ると表 4 の如くである。懇話会時代の第 1 回 69 名から、学会時代となった 1992 年には、991 名となり、10 年間で約 14 倍の増加である。

VI. 本学会刊行学術雑誌について

一般的にいて、学会の発展を学術の歴史に実際に残すものとしては、当該学会の発行する学術刊行物であることは、広く認められるところである。そこで、次に本学会が懇話会時代から、どのような学術雑誌を刊行して現在に至って来たかについて述べる。

1. 口腔腫瘍懇話会記録 (表 5)

1983 年から 1985 年に至る口腔腫瘍懇話会時代には、口腔腫瘍懇話会記録が、毎年 1 回ずつ刊行されてきた。

その第一回は、1983 年 (昭和 58 年) 9 月 1 日発行で、39 頁であった (写真 6)。内容は、世話人代

表 5 学会刊行学術雑誌について (I)

—1983 年～1988 年に至る—

雑誌名	発行年	投稿論文	学術講演抄録	その他
第 1 回口腔腫瘍懇話会記録 (39 頁)	1983 年	—	一般講演 14 題	
第 2 回口腔腫瘍懇話会記録 (53 頁)	1984 年	—	一般講演 28 題	会則掲載開始
第 3 回口腔腫瘍懇話会記録 (94 頁)	1985 年	—	特別講演 1 題 一般講演 42 題	
第 4 回口腔腫瘍研究会記録 (119 頁)	1986 年	—	教育講演 (表題) 特別講演 1 (4 頁) 一般講演 51 題	決算・予算掲載開始
口腔腫瘍研究会誌第 5 号 (152 頁)	1987 年	—	第 5 回口腔腫瘍研究会 招待講演 1 (表題) 特別講演 1 (表題) シンポジウム 6 題 (14 頁) 一般講演 59 題	総会議事録掲載開始
口腔腫瘍研究会誌第 6 巻 (176 頁)	1988 年	原著 1 編 (10 頁)	第 6 回口腔腫瘍研究会 特別講演 1 題 (2 頁) シンポジウム 6 題 (15 頁) 一般講演 60 題

写真 6 第1回口腔腫瘍懇話会記録表紙

写真 7 第4回口腔腫瘍研究会記録表紙

表の初めの言葉、懇話会設立趣意書そして、講演発表14演題の抄録より少し詳しい2頁の研究発表であった。各発表には、懇話会発表時の質疑応答内容と共に、図・表が3個まで無料で許されたので、当時としてはそれなりの懇話会雑誌としての意義も認められて発足した。

第2回記録は、1984年11月1日発行53頁であった。第一回同様に第二回懇話会発表の講演28演題の研究内容を各2頁取ったが、一頁の場合もあった。この第2回記録から、本口腔腫瘍懇話会会則を掲載した。

第3回口腔腫瘍懇話会記録は、1985年12月15日発行、94頁と、頁数は前号より倍加した。その理由は、一般講演発表分の記載が増えたほかに、特別講演として、佐藤教授の「頸部の臨床解剖について」のオリジナル原稿を4頁頂いたことにもよる。これは、本記録を量的のみでなく、質的にも高め、懇話会から研究会に移行する契機ともなった。

こうして、懇話会から研究会に移行したのが1986年であるが、それに伴って機関学術雑誌も懇話会記録から研究会記録、同会誌へと移行していった。

2. 口腔腫瘍研究会記録および同会誌(表5)

すなわち1986年は、懇話会記録の名残を受けて題名が「第4回口腔腫瘍研究会記録」であって、119頁、12月25日発行であった(写真7)。内容として、第4回研究会発表の特別講演一題の4頁、

一般講演51題の研究発表が掲載された。その形式はまだ、懇話会時代と大きく変わらなかったが、会の決算報告並びに予算案などが掲載されるようになった。1987年から、雑誌は口腔腫瘍研究会誌第5号と銘打たれ、152頁、12月25日発行である。この会誌には、第5回口腔腫瘍研究会の一般講演題60発表の研究抄録ないしは概要が掲載されると共に、シンポジウム6題の概要も掲載された。その際、シンポジウムに合わせて行われた討論が座談会のごとく7頁にわたって記載されているが、読み返してみると、同類他誌には見られない特異的な記録であり、時間の経過と共に、歴史的意義を大きくするものかと思われる興味深い内容であった。

1987年12月に刊行された会員名簿には、450名余の会員の住所・所属などの掲載と共に、幹事31名(内:常任幹事9名)、監事2名などの役員、口腔腫瘍研究会会則、賛助会員などが掲載された。

口腔腫瘍研究会誌第6巻は、1988年12月1日発行、176頁であった。本会誌の前号が第5号であったから、本来この号は6号と呼ぶべきであったかもしれないが、巻・号数を通常の学会雑誌に合わせて行かねばならないであろうという認識にたって、やや不統一のそしりは免れないであろうが第6巻と称した。しかし、後で考えると混乱を来す元にもなったと思われ反省されたが、正式の編集委員会のできていなかったことの弊害でもあったと思われる。

表 6 学会刊行学術雑誌について (II)

—1989年～1992年に至る変遷—

雑誌名	発行年・月	投稿論文	学術講演抄録・その他
日本口腔腫瘍学会誌 第1巻 第1号 (228頁) 学会役員会, 総会議事録, 役員名簿, 学会会則(改正) (’89. 1. 20より施行) 掲載 投稿規程他を掲載. 編集委員会設立 (委員長: 高井宏教授)	1989. 10	6 編 総説 1 原著 2 臨床 2 症例 1	第7回日本口腔腫瘍学会 (第7回日本口腔腫瘍研究会) 特別講演 2 特別発言 1 一般講演 75
第1巻 第2号 (pp. 229-283, 54頁)	1989. 12	7 編 臨床 2 症例 5	—
第2巻 第1号 (122頁) 投稿規程改定	1990. 06	4 編 原著 2 症例 2	第8回日本口腔腫瘍学会 ワークショップ 2題 一般演題 70題
第2巻 第2号 (pp. 123-222, 100頁) 投稿規程改定 (’90. 10. 9)	1990. 12	11 編 原著 1 臨床 5 症例 5	
第3巻 第1号 (190頁) 投稿規程改定 (91. 6. 10) 第9回学会総会議事録 役員名簿	1991. 06	11 編 原著 1 臨床 6 症例 4	第9回日本口腔腫瘍学会 (第16回国際顎顔面外科学 会議・併会) 特別講演 2 一般講演(口演) 169 " (示説) 86
第3巻 第2号 (pp. 191-266, 76頁)	1991. 12	8 編 臨床 4 症例 4	
第4巻 第1号 (212頁) 第10回学会総会 議事録掲載	1992. 06	14 編 原著 2 臨床 7 症例 5	第10回日本口腔腫瘍学会 特別講演 2 ワークショップ 8 一般講演(口演) 58 " (示説) 57
第4巻 第2号 (pp. 213-298, 86頁)	1992. 12	12 編 原著 2 臨床 5 症例 5	

しかしこの号から, 紙質を向上させ, そして初めて原著論文が一題10頁印刷・掲載された。そのほかは前5号と同様に, 特別講演, シンポジウムについて概要と, 討論の内容が掲載され, 一般講演については60題分が記載された。

3. 日本口腔腫瘍学会誌 (表6)

以上のような試行錯誤を続けながら, 本研究会

は, 1989年より, いよいよ学会誌発刊へと発展していった。すなわち同年10月日本口腔腫瘍学会誌第一巻第一号が発行された。第7回日本口腔腫瘍学会発表研究抄録ほか関連事項, 石川悟朗先生にお願いした総説論文一編, 研究原著2編, 臨床などの論文1編, 計6原著論文が掲載され, その発足としては十分な内容であった (写真8)。

写真 8 日本口腔腫瘍学会誌第1巻第1号表紙

研究会時代までの機関誌の表紙の色は紅色を主体としていたが、学会となってからの雑誌の表紙は、水色と白を組み合わせたものとして、今までと一新させた。一卷一号の本誌の頁数は228頁で、今までの中で一番厚くなったが、2号以降は、総会と関係なく、投稿論文のみとなるので、その論文の集まり方が心配となった。

そこで、1989年1月21日第7回日本口腔腫瘍学会総会にて編集委員会が設立され、高井理事に委員長をお願いし、投稿論文を集めるに当たって、質的に高いものを数多くという方針で、投稿規定の改変ほかを進めて頂くこととなった。

本学会誌1巻2号は、投稿論文7編を持って1989年12月発行の運びとなった。しかし、そのヴォリュームは少なく、54頁であった。そこで、編集委員会としては、投稿論文をもっと増加してもらうために、学術総会発表の研究発表投稿を、図表付きにすることなく、通常の事後抄録同様に、800字のみとするように、投稿規定が改変された。

この新しい方針のもとに組まれた2巻1号は、1990年6月発刊されたが、第8回学術総会の関連内容のほか、投稿論文4編を持って122頁に終わった。これは1巻1号の半分余りの量であった。次の2巻2号は、同年12月刊行、投稿論文は11編全100頁で、投稿規定の改変と共に、1巻2号の2倍近いヴォリュームとなった。

3巻1号は、1991年6月刊行、第9回総会の関連内容が掲載されたが、同学会は、第16回国際顎

写真 9 第9回日本口腔腫瘍学会と併合開催した第16回国際顎顔面外科学会 (IAMFS) 学術総会発表論文集 (Proceedings of the 16th Congress of IAMFS, 1991) 表紙

顔面外科学会と併会であったため、後者の Proceedings (写真9) に掲載される英文論文と一部相互移行掲載されたから、当然論文数も多く、ヴォリュームも大きく190頁となった。しかし、和文と2カ国語で発表されたことになる論文もあったから、国際交流の立場からも、発表者自身にとってもメリットの大きい試みであったと考えている。3巻2号は同年12月発行、投稿論文8編、76頁でやや少なかった。

4巻1号は1992年6月刊行、第10回学術総会関連内容のほか、投稿論文は14編、212頁で、3巻1号よりも大部のものとなった。特に原著論文にはIAMFSの常任理事を務め、1991年の大分における国際学会にも貢献してくれたドイツの Gitt 氏が英文投稿をしたので、論文の質と共に国際交流の一環として掲載が認められた。

第4巻2号は、同年の12月発刊で、投稿論文は12編の多数であった。

このように、本学会機関雑誌、日本口腔腫瘍学会誌への関心は全国的、大きく言えば国際的にも高まってきており、投稿論文も増加している。これは、本学会の本来任務である学術活動の一層の活性化が進められていることを意味するものと考え、喜ばしいことである。更に本学会誌の発行期日に間に合うようならば、学位取得のための論文

も原著として投稿したいという希望も再三出されており、また、現在の年3回発行を、4回にして欲しいという声も聞こえている。そこで、第11回総会で討議され、1993年度から、年3回、近いうちに年4回発刊の体制に進もうという段階に入った。

なお、本学会誌は、日本国会図書館、大分県立図書館他に常置保存され、今後とも継続的に送付されることが望まれていることを付記しておく。

VII. 日本口腔腫瘍学会の未来への展望

最後に、本学会の未来への展望ということであるが、1993年の第11回学術総会は、その懇話会創設以来の10年一区切りを終えたことを意味し、ここから新しい歩を踏み出すことになるという意味で、新たな展望の学会年といえよう。

来る1994年の第12回は博多で神田教授によって主催され、次の1995年の第13回は、大阪の岡野教授のもとで開催と決められている。このようにして、学会としての歩みを積み重ねて行くという事は、本学会参加者の増加と共に、その研究発表の質的向上につながって行くものと希望され、進められよう。

それはまた、日本の口腔腫瘍の臨床の一層の進歩、発展、患者への福音としてフィードバックされ、それによって、本学会の存在、発展の意義が一般にも広く認められることにつながるであろうと考える。

国際的にも、本学会誌の4巻1号にドイツ Leipzig 大学の Gitt 博士の論文が掲載されているように、すでに本会誌への欧文論文発表の希望も出されており、将来はその実施のためのルールが創られ、国際化する本学会、並びに同学会誌の姿が浮かんで来ている。その前例としては、フランス、パリにおける Prof. Popescu が発行している口腔外科の雑誌が挙げられる。この雑誌においては、母国語のフランス語と国際語としての英語の2か国語の論文誌であるが、われわれの日本口腔腫瘍学会誌も、あるいは、そのような存在、邦文と英文の論文両者掲載になる可能性も秘められている。

本学会の特色、特長を考えてみると、その懇話会設立の時代の初心に見いだすものであり、その

もとに戻り、その発展、展開の系譜をたどって必要性が挙げられる。

すなわち、口腔腫瘍の臨床、研究におけるテーマは、それが納得の行くまで討論し、追求して行く。そのための時間は惜しまない。一回の学会の会期時間内で消化されなかったならば、そのテーマは次の学会に持ち越し、宿題とする。

古めかしい言い方かもしれないが、真理探究の前にあっては、先輩も後輩もない。会員全員が対等に討議し合う。それは man-to-man の寺小屋様方式になされる討論であつてもよく、かつ、各関連専門領域の立場の研究者、臨床家が広く集まって、知識、知恵を出しあつて勉強をする。足りないことと不足するところは必ず次の学会への課題、宿題とする。

このような懇話会時代の姿勢、初心は、本学会の将来、発展にあたつても、絶えず忘れずに持ち続けてほしいところである。

第11回学術総会長、大橋 靖教授の主催された学術総会は、正に本学会の懇話会時代の初心を思い起こさせた企画、運営、展開であつたと考えた。2つのワークショップは、過去10年の本学会の研究発表業績の中から、凝集、集積された宿題の大本の二つであり、たぶん、更なる課題が来年以降に持ち越され、繋がって行くであろうと思われる。後輩、先輩も、医員、医長、教授も同等の Ebene 平面に立っての討論は、本学会、昨日の懇話会の貴重な楽しい時間の中にも実現されたが、それは、そのまま学問の世界、その運営にも受け継がれていくであろう。

VIII. おわりに

日本口腔腫瘍学会が1983年に口腔腫瘍懇話会として大分に創生してから、今年で丸10年余、今日迄の歩みを、その懇話会時代、研究会時代、更に学会への改組後の3時代に分類し、今回の大橋総会長による第11回学術総会に至る発展の歩みについて記した。

その主題は、学術発表の総会、プログラムの内容と、機関学術誌、すなわち口腔腫瘍懇話会誌、口腔腫瘍研究会誌、そして日本口腔腫瘍学会誌への変遷を経て今日を迎えた発展を取り扱った。

本学会について、在来からの類似の学会との違

い特長付けを一言で述べるならば、本学会は、口腔腫瘍についての専門的研究を、ローカルなもの地域的に制約されたものとして捕らえるものでなく、全国的規模において進め、国際的連携をも目指すものといえよう。これは懇話会発足の時から精神であり、発展に伴い新くなる内容、新しき器をも変わることなく支えるものとする。今後、会員の各位、特に若い新進気鋭の専門家が、本学会を口腔腫瘍の臨床と研究を進められる上で、大きな柱の一翼として育てられ、更なる一層の研鑽を積み重ねることを、それによって、本学会が質的にも量的にも高く、大きく発展することを願って終わりの言葉とする。

本稿の概要骨子は、新潟において1993年開催された第11回日本口腔腫瘍学会学術総会の特別講演として1月28日に発表されたものに基づく。本稿の完成に当たっては同学術総会の大橋 靖総会長並びに関係各位、及び、日本口腔腫瘍学会事務局の柳沢・水城・京極・関・松島・河野の各位に感謝する。

別刷請求先：清水正嗣

大分医科大学歯科口腔外科学教室 気付

日本口腔腫瘍学会事務局

〒 879-55 大分県大分郡挾間町医大ヶ丘 1

A record of the 10-year history of the Japan Society for Oral Tumors and future prospects

Masatsugu Shimizu

Japan Society for Oral Tumors (Chairperson of the board of directors) &
Department of Oral and Maxillo-Facial Surgery (Chairman: Prof. M.
Shimizu), School of Medicine, Oita Medical University

Abstract

The Japan Society for Oral Tumors originated 10 years ago, at the Meeting for Oral Tumors, held at Oita Medical University on February 26, 1983.

These ten years are characterized by three periods: the Meeting (1983-85), the Society for the research of oral tumors (1986-88), and the Society for Oral Tumors (1989-until present). In each period, academic meetings, conferences or congresses were held and journals were published. The records of these conferences and congresses and the journals have been reviewed already.

The number of society members, including those from the meeting period, increased from 69 in 1983 to 991 in 1992.

The Journal of Japan Society for Oral Tumors (abbreviated J Jpn Soc Oral Tumor) is presently published three times a year. However, society members are keen for the journal to be published four times a year, and it appears that this will soon be the case.

Since the Meeting for Oral Tumors in 1983, the society has upheld that all members should have the right to present the results of their scientific research, and be able to discuss research problems with other members democratically and on equal terms. If a problem is not resolved in a single session, it can either be discussed without time limitation or be given first preference at the next congress.

All people who have an academic interest in the research of oral tumors throughout Japan are eligible to participate in the society and the congress. In the near future, the society intends to expand not only nationally, but also internationally to include participants from other countries.

Key words: Japan Society for Oral Tumors, Meeting for Oral Tumors, Society for the Research of Oral Tumors, Journal of Japan Society for Oral Tumors, J Jpn Soc Oral Tumor (E. abbreviation)

Requests for reprints to: Dr. SHIMIZU M. Dept. Oral & Max. Fac. Surg. Oita Medical Univ.
Hasama-machi, Oita, 879-55 Japan